

栗

毛を短くカットし、知的な面
ざしの女性だった。ウッドロ

ー・ウィルソン・センターに遅れて
姿を見せ、僕の隣席についた。「ドイ
ツ統一が東アジア情勢に与える影
響」。高名な外交専門家のレクチャー
だったのだが、なんとも退屈な内容
だった。初めは熱心にメモを取って
いたが、それにも飽きて思わず目を
見合わせた。淡いブルーの瞳がいた
ずらつぽく微笑んでいた。あうんの
呼吸で席を立ち庭が見えるティール
ームで、アラビアのロレンスの『七
つの知恵柱』について語り合った。
偶然の出会い」。国防総省高官の
アポが突然延期になり、ふと思いつ
いてこの研究所にやってきたのだか
ら、誰も僕の行動を事前に知ってい
るはずはない。そう、確かに突然の
遭遇であつた。だがいまなお予期せ
ぬ出会いには微かな疑念が残ってい
る。彼女は気鋭のCIA（米中央情
報局）の秘密課報員だった。

世界最大の諜報機関CIAを語ろ
うとすれば、どうしても散文的にな
ってしまう。情報工作部門と分析部



講談社
1995年

旬のテーマを読む

CIA

国家のために「至難の業」に挑む世界最大の諜報機関

てしま りゅういち
手嶋 龍一（外交ジャーナリスト・作家）

Book Review

門が整然と区別され、あまりに巨大
な官僚機構なのである。冒頭で紹介
したエピソードはこの組織にいか
にも似つかわしくない。だが創成期の
CIAはもつと人間的な逸話に彩ら
れていた。有馬哲夫著『アレン・ダ
レス』は、超大国アメリカの対外諜
報機関が誕生する瞬間を活写して余
すところがない。アレン・ダレスと
いう外交・情報・安全保障の世界に
生きたプロフェッショナルの生涯に
寄り添いながら、インテリジェンス
という多義的な世界の本質を見事に
照らし出している。

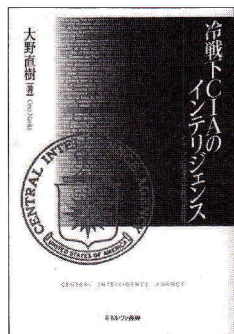
アレン・ダレスはCIAの前身に
あたるOSS（戦略情報局）の欧州
責任者として、スイスにいて第2次
大戦の対日終戦工作を担当した。ア
メリカが既に原爆を手に入っていたこ
ともヤルタ密約の内容も握ってい
た。一方、間もなく大統領となるト
ルーマンには何ひとつ知らされてい
なかった。ダレスは日本への原爆投
下に反対し、ソ連の対日参戦を避け
たいと、ベルリンにいた日本の海軍士
官と秘密接触を続けていた。インテ

リジェンス・マスターの内面では、
米ソの冷たい戦争の幕が既に切つて
落とされていたのだろう。

インテリジェンスは錯誤の葬列で
ある——こう指摘されて久しいのだ
が、なるほど、失敗の歴史が延々と
続いている。真珠湾の奇襲、サダム・
フセイン軍のクエート侵攻、9・11
同時多発テロ。アメリカの情報当局
はいずれも予知にまずまっている。
インテリジェンスとは、国家の命運
を委ねられた指導者が下す決断のよ
りどころとなる情報のエッセンス
だ。それゆえ、近未来に向けた決断
の彼方を照らし出す力を秘めていな
ければならない。だがそれが至難の
業なのである。だからこそ、日本を
除く主要国は、対外情報機関に膨大
な予算と人員を注ぎ込んでいる。そ
の理論と実践を知りたい読者にはマ
ーク・M・ローエンタール著『イン
テリジェンス』と大野直樹著『冷戦
下CIAのインテリジェンス』を薦
めたい。日本が軽武装国家でありな
がら長い耳を持つとしなかった誤
りに慄然とするだろう。



慶應義塾大学出版会
4410円



ミネルヴァ書房
4200円